



中村俊定文庫  
文庫 18  
299  
2







誹諧温故集之下



東武 雷風菴蓮谷選

秋の部

立炆

凌雪の巻吹消しと秋の秋し由

三夕もまよや望月のと秋の秋元隣

かたひらの尻をうしやと秋の秋尚白

ひりし家とるまをを質うりまを  
あつしはまき奇師の丸座と

まろふの巻秋もつりてと秋の秋蓮谷



乞巧奠

七夕や姑と祈るゑはしめぬ  
 ち切の敷きぬるり天の川  
 肌さむきけりや星は別道より  
 けさのうれありくや如七夕  
 まぬまをと楯の七葉やまき  
 七夕や姫りりては又はくま  
 セツふよ同つめさつ天は海  
 ちきりぬるる魚は細ての川

芭蕉  
 其角  
 乙由  
 才奮  
 貞佐  
 白雲  
 珪珠  
 沾洲

我や糸をくわては天の川  
 七夕やうらうらと三葉の糸  
 霧の橋や跨入の百人一首  
 初つ葉をくわては天の川  
 霧やよのこりあはとほり  
 昆布の世々の通は天の川  
 さきれいの尾を尾をつけて天の川  
 流るのけりうらとほり  
 月の七日燈りて星の出無り

起波  
 濟通  
 許六  
 菊輔  
 超波  
 敬雨  
 蓮谷  
 嵐雪  
 因



天地と題し

天をわたりてのねを 宗因  
地をわたりてのねを 其角

玉祭

雲ふ時よ 春風  
みねの玉を 起波  
玉の玉を 餅夢  
目もくも 乙由

燈籠

高打籠り 貞佐  
高打籠り 千那  
高打籠り 其角

盆の月

満ちたる月 蓮谷  
あやしく人の心 瓢斗  
ほろひたる月 大梅



踊

稽立の松をありおとするの跡  
 氷花  
 朝夕の風をよみよみよ踊る跡  
 跡  
 ちりちりのちりちり踊る跡  
 欠  
 刀夏の新ちれてみしおとする跡  
 振波  
 一やふりりおとする跡  
 尚白  
 一も金銀とおとする跡  
 キ舞

箱書

いふつやや誰自りう出て来よ入  
 古山夕

箱書や石白耳をわらふなり  
 春  
 いふつやや誰自りう出て来よ入  
 春  
 箱つりの跡とおとする跡  
 ちよ

秋風

秋風や萩を扇も石の跡  
 ち世  
 水色の心とこまね 揺する  
 風音  
 腹あてや背もかりり 秋の風  
 ち世  
 古くとりあとのせきり 秋の風  
 ち世



秋風やうらうらと吹さるるす膳下の懐  
秋風  
かつらうらうらと吹さるる葦や秋乃風  
秋とふ風ハさうさうと心奪り耶  
き自

露

ゆるかやをふかふりたる星下  
宗因  
朝露や指さるるさるるうつの山  
肅山  
ふかふかやうらうらと目と指さるる  
風雪  
ゆるかやうらうらと世一分を在れ  
桃  
みづけとやうらうらとさるるさるる心  
玄扎

女郎花

愛さるの其根ハうらうらと  
梅盛  
身のうちをさるるさるるさるる  
涼菟  
物人さるる立物さるるさるる  
しらよ  
葉のほのこしハ秋乃風をさるる  
すはら  
口酌て笑やあむさるるさるる  
超波  
稽よさるるさるるさるるさるる  
音哉  
さるるさるるさるるさるるさるる  
季吟



朝貝

朝貝の形海吸てくま世なる  
 常牧  
 朝貝の形海吸てくま世なる  
 来山  
 朝貝の形海吸てくま世なる  
 専吟  
 朝貝の形海吸てくま世なる  
 貞佐  
 朝貝の形海吸てくま世なる  
 珪琳  
 朝貝の形海吸てくま世なる  
 杉風  
 朝貝の形海吸てくま世なる  
 蓮谷  
 朝貝の形海吸てくま世なる  
 沾洲

蜻蛉

蜻蛉の形海吸てくま世なる  
 沾洲  
 蜻蛉の形海吸てくま世なる  
 超波  
 蜻蛉の形海吸てくま世なる  
 珪琳

虫

虫の形海吸てくま世なる  
 去来  
 虫の形海吸てくま世なる  
 本草



しのみの控西を——生の夜  
 武蔵地獄の音もみよ——生の声  
 生れか声かか——生れかす  
 脱——生れかか——生れかす  
 生れかか——生れかす  
 甲——生れかか——生れかす  
 秋の影も入てなるとや裸も——  
 生れかか——生れかす

鬼也

生れ

生れ

生れ

生れ

生れ

生れ

生れ

薄

生れかか——生れかす  
 生れかか——生れかす  
 生れかか——生れかす  
 生れかか——生れかす  
 生れかか——生れかす

鬼也

生れ

生れ

生れ

秋の月

月やゆめ秋の月を——生れかす  
 月やゆめ秋の月を——生れかす

生れ

生れ



吟のうらうらと海とてしるあめの月 立圃

我と連て我教く入る月 兼堂

わの月や海みほこの樹うら 柳立

天の戸のすうしあうよ三日の月 光貞書

深川まき

舟のや照月をいと抱えうひ 欠代

月撰人との題を

閑さどくけかゝるん石の月 虚谷

るぞうやまめすう月のうられ義 令徳

有のや二才と我推の梢より 伝法

一指とりつる月の木すまみ 欠代

罪をうて配下の月や伝法先 キ角

兼應元年八月廿九日  
欠宝西武へ点とゆうし  
時柿園めあ書り

天のうらうらとせむむらや秋の月 欠法

深ま志とんのをめり又家 欠宝

水鳥をみらぬねり考足えく 西武







翫月辞

野立圃

昔よお侍人くとも月の月ハ暮るや  
 えんかこよをやとひ定めて日のうちより  
 出逢ひかきこむる月さするも名を傳  
 光りたりとくらしくあつちまふてむし  
 今のまねの影くもひやうも我あらず  
 あらよりのやんくもまよりのゆとまはる  
 とびくくも月よんや月ハ暮るも月と  
 いひはるくも月の影をわくもまはる

いとくくく笑つりやまもよるあし  
 花の都あもま日松の山もあつちま  
 月よ梅川、あつちまといふまはるの影を  
 いとくくあつちまといふまはるの影を  
 月よ梅川、あつちまといふまはるの影を

月よ梅川、あつちまといふまはるの影を  
 月よ梅川、あつちまといふまはるの影を  
 月よ梅川、あつちまといふまはるの影を  
 月よ梅川、あつちまといふまはるの影を

立圃



良夜

名月や耳の山風目のなかり  
朝とていふは里もあつた月  
名や唐まゝ大なる世界月を  
そとなく人を休むる月  
馬帽をかきかへる月  
名月や柳の枝をさへ吹  
そとなく包めり月

信徳  
来山  
西鶴  
立圃  
芭蕉  
其角  
嵐雪  
路通

芝海をのち七つとて月  
新月や海とをさへ一  
精をのち水もあつた月  
名月や鏡の光を我無時  
見とていふは日あり月  
鎌倉の古よりあり月  
名月やえりも唐の  
名月やわらわらも柳の  
名月やえりも子

貞佐  
琴風  
白雲  
貞佐  
山夕  
黒露  
丹雲  
新輔  
蓮谷



頃平るハ平家かきりて月えの 花雀  
名りやいよまいの 名 蓮  
名りやいよまいの 武藏坊 其茶  
名月やまの 数日のふいふ 秋風  
二のころのふいふ他人の月えの 浜海

鶉

ふりていよまいのふいふ 粟田 休甫  
名根やまの 藤氏の捨え鶉籠 古き峨

美のふいふ 康定と和る鶉籠 久代

雁

名美ふいふ 高次の屋敷より 千海  
名一や山配とて 妙よまの 次 かりよ  
名一や一声音とて 一 園 乙由  
名のやまの けまの 一 天は 房 蓮若  
名一房やあまの 田一 一 比 比  
名一房やあまの 一 母の 目う 覚 強 強











自画賛

あらしひけ我も憐れなるのえ

不登

松竹

清くを言てとほや花のえ

御立

あまのこころあり

あまのこころあり

尚白

あまのこころあり

キ自

紅葉

日ハ入るも時清なるおれ

天代

しづかの心く

し由

小おののかけしけ

古秀和

いふつよ下

蓮谷

あまのこころあり

立圃

菊

かんくんのみ糸ハ

片江

菊さく下

蓮谷



ねの尾し社氏ありしや下菊  
あまのつきのなごころやまきの花  
さめくのもむらじふ花や菊の花  
みづうりの百舎ふ全ぬ葉のつこ  
負佐  
超波  
蓮谷  
無倫

芦穂

あゝのるやあまをくあけのまむ  
きりのあやまめくまのちるあられ  
文草  
路通

十三夜

やうあ山とくまのふあなほる  
二日月のあけああり十三夜  
弦訪の面よほのなほや十三夜  
あま山とねえうつ十三夜  
負佐  
珪琳  
負佐  
し由

栗

スレ山よ  
あまもろく鬼のあまのあまの  
素堂



いづれに神をよみ様の思ひる 其白

葛葉

遠の跡もあつゝ 葛の葉のくま 嵐雪

三のつらみあつゝ 葛の葉の 宗因

秋雲

秋の空に富士とくらくふあつゝ 古ト尺

去勢気とくらくふあつゝ 鬼貫

秋

口十雀とももゆまふ山あつゝ 慶友

せの鳥のありともあつゝ 芭蕉

とらふや破みそのうれてあつゝ 言水

あつゝ 焼きあつゝの骨中 其角

耳指やあつゝ 神とあつゝ 常陽

夕ふゆや秋ハあつゝのせうき 由

毎ふゆやあつゝのそあつゝ 一晶



武蔵野や沖はるこのよりのむ

出雲 風水

宗祇法師三回忌

世よりかく地獄へ落ちぬてふうら

宗鑑

秋の田や中り片くして稗二俵

尚白

とらるや皆書あまふうねを

無倫

かゝる言と控ふまゝや東條

貞佐

せまぬいやはかすいふてゑの上

起波

六ヶ所仙あつうゝあつゝ杜みよ

蓮谷

遅ひ天のけりふ及んでふ成る

琴風

對園女辭

西鶴述

作勢小町をえぬ世の芥人介の世おいせの

うらう周いゝる女の俳諧をこけて後萩の

まゝな浪速の里を志しての我を懐く二見

笑おねの海ふと見えてまのうらうり

あまの海ふと見えてまのうらうり

えんたの書世を糸の控をこむるを

あまのうらうの世の糸の控をこむるを

月の影をいふあまの糸をこむるを



夕風吹く夕のまもり  
そよとぬれはる。

夕霞や夕風ふさふさ女あまの  
西鶴

夕日や夕のまもり夕のまもり  
其角

夕のまもり夕のまもり人あり夕の

夕のまもり夕のまもり夕のまもり

夕のまもり夕のまもり夕のまもり

夕のまもり夕のまもり夕のまもり

柏のわらう夕のまもり山のまもり夕のまもり  
嵐雪

沈のまもり夕のまもり夕のまもり  
一品

接ぎや地と地とのわらう夕の  
起波

夕のまもり夕のまもり夕のまもり  
敬雨

夕のまもり夕のまもり夕のまもり  
蓮谷

夕のまもり夕のまもり夕のまもり  
珪琳

夕のまもり夕のまもり夕のまもり  
起波

夕のまもり夕のまもり夕のまもり  
馬光

夕のまもり夕のまもり夕のまもり  
隆平

夕のまもり夕のまもり夕のまもり  
其角

夕のまもり夕のまもり夕のまもり  
其角



冬の部

木枯

あかりしゆ果ハるりう海の高 言水  
 こうりしゆ二日の舟の波ちるう 荷兮  
 木枯やまもえん次ちりもせは 智月  
 おろしや候の目よえるおあす 蓮谷

貴船

風よりの毛もよるり海山の家 同  
 あしとまもるりあしつ尾長を 珪琳

時雨

一順の口向めあしつ一はる 宗因  
 耳くゆく耳あしつゆあふるれうか 一品  
 風声天地のがすりあしつあし  
 ち他のそりしゆまもるりあしつあし 湖春



まのいふ乃ぬれを食りん砂時面 し由  
志らおろや常流のつね小奈山 起波  
月と日と皺とよせしるはるる 珪琳

あまのつらさ

まのいふ人をもよほする山ありぬ 其角  
ゆめつらのかつこせさるるはるる 黒露  
いづつらのかみハ眠せるはるる 宗瑞  
神鳴もちく面に 餅夢  
何とたれ如ともえんははるる 耳谷

落葉

あのかつらるるゆきまよむむ掃掃也 春澄  
まのいふも三日月とよむるはるる 素堂  
あまの電 燈もよのうはるる 貞作  
まのいふのまのいふはるる 乙由  
果ハまの佛のまのいふはるる 珪琳

藤田毒

まのいふのまのいふはるる 蓮谷



初雪

とうちやうやまをるのえよひえの山 如泉  
 神やちや甲よあしきとてわらふ亀 白雲  
 はくちやちあ京のえよ大文字 宗瑞  
 神やちや神まかしく人あふる 超波  
 神やちやちやまを判人あわり 安士  
 とうちやちやまをるのえよ大文字 木因

雪

白雪や焼ぬかすの雪め枝 忠知  
 雪のねるねもくくくくくくく 宗因  
 うとん金へり空佛ちうおあめ 其角  
 何とてんも雪ねるくあもあ 徳元

雪のつらさを連てたの  
 雪のつらさを連てたの

我子あつたつたつたつたつた とも  
 雪のつらさを連てたの 路通  
 雪のつらさを連てたの 作者不知  
 雪のつらさを連てたの 休甫



武蔵系系名のおしきき七浦 欠化

無〜〜〜〜〜や雪の門 去来

雪の末や雪うんてゆ〜〜〜 俊山

必死の云

山をめぐらうもおきつ 松乃雪

寒山賛

一葉悲ふ川のやるとくを合つお 千雨

白かり〜〜〜〜〜のやる 秋色

そよの雪おひ吹く〜〜〜〜〜なり 玉姫

大雪の雨とま〜〜〜〜〜川 欠化

和州はの〜〜〜〜〜

あつた〜〜〜〜〜の〜〜〜〜〜 蓮若

雪〜〜〜〜〜今〜〜〜〜〜 奉白

狂女伝と云

狂女もや狂女もあ〜〜〜〜〜 音尾

知やるやきれうや〜〜〜〜〜 藤雪

白ゆきやま〜〜〜〜〜の〜〜 小笠



寒

り脚の指を封して

をいづつ定めて起す方ありし

任是人

門口より二尺を毎日のしるす

沾洲

手あかハ尻もかく次さむはらふ

園女

旅行

大石のらあらうとて舞するをり

許六

疾揚の息をとえつけるをり

瓢斗

ととと切らぬわのわをり

許六

耳揚

耳より鼻もかすれぬをり

蓮名

耳根揚

珠粒より二粒を毎日のをり

同

まねる法

折心のありしけり

同

残りのやきもぬる

し由

隣り合を物の松より

巴抄



霜

白仙ききとあはれ  
あはれ

古くや瑞切大根のまゝのまゝ

東海

態取のまゝあはれあはれあはれ

さな

あはれあはれ

きいしく麻と振うくしおのま

蓮花

神をぬぐい合ふくまの 鐘の声

地

妙身童女とあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

き

霰

心つれて及ぼすあはれあはれあ

を

花脚屋のあはれあはれあはれあ

身

愛宕山より

土を投てくけするあはれあ

蓮花

あはれあはれあはれあはれあ

同

土母はあはれあはれあはれあ

欠



紙子

かろ糖より倉のけりなる紙なるか 木原  
るはりしと糖の紙しかみこり耶 香川  
定故のきそありて其のきそ 蓮若  
まど切とかたと紙とみこり耶 馬若

隠逸情をうけて

隠逸のきそとぬくの紙なるか 蓮若

氷

茶のころと氷とまきする氷こ耶 宗體  
俄鬼の目とおまひやむ氷か 貞室  
荒海へ舟かゝ投るありふ 浜波

一休和尚も神仏のこころ

情おせば氷るもな 車 陸琳

栢葉のこころ

柳のころの投るも氷るも 貞徳

そとほのこころ

そとほのこころは氷るも 蓮若



鉢歌

めるる川を流し 鉢歌 其角  
 流るる川を流し 鉢歌 素堂  
 今よにし 鉢歌 其角  
 世の中は是より 鉢歌 其角  
 ありてく 鉢歌 其角  
 神のまはる 鉢歌 其角  
 世のまはる 鉢歌 其角

鉢歌

神のまはる  
 ろ川を流し  
 世の中は是より  
 ありてく  
 流るる川を流し  
 今よにし

晋 其角

流るる川を流し  
 ろ川を流し  
 世の中は是より  
 ありてく  
 流るる川を流し  
 今よにし



七十	あま	すれあつと
やう	こん心	拵あつと
ほろ	わつし	拵しつぎ
あつ	あまらふの	拵ききやが

味之丞女乃乃焼や 樽鼓 千目

頭巾

うらわー 作違お人丸 政中 玄札  
 湯すー 是と果てり せしる 政中 木子

いん	くの	政中	結果	や	丸	政中	柳
生	弱	山	ま	あ	か	く	と
人	氣	の	も	も	ま	り	角
山	ま	の	味	鳴	つ	ま	ハ
音	の	中	丸	い	あ	ま	ま
道	色	は	は	か	し	か	し

火燈

信りや 大燈 ちん ちん の さう ちん

去院



服袴と猫と夫婦と古雄の歌 奉白  
 古雄まねてまゝむしと磨る曲 貞代  
 竹の節を入るるよとくうらむ 支考  
 山とくちとくちとくちと古雄の歌 蓮子  
 我も人まゝの世にぬるるの世 百立志  
 いりくまゝ入るる世と古雄の歌 陸珠

火桶

抱て扇も肌の中と古雄の歌 貞室

手くちくちと古雄の歌と古雄の歌 宗昭  
 火桶抱ておかしな世をかくしり 万延

千鳥

鳥のいゝとくちとくちと古雄の歌 貞室  
 一羽とくちとくちと古雄の歌 巴都  
 狼のぬくぬくと古雄の歌 史那  
 鳥のいゝとくちとくちと古雄の歌 蓮子  
 古雄のいゝとくちとくちと古雄の歌 其奈



きんぎょり 我のふりさるるのき 車考

ゆららの藤を

くさるるも 匠のふりさるる 蓮考

あふりのあふりさるるを

あけちやけ 福のふりさるる 友ちさるる 法琳

網代守

藤のふりさるるのあふりさるる 木守

網代守のふりさるるのあふりさるる 守考

あふりさるるのあふりさるるのあふりさるる 支考

あふりさるるのあふりさるるのあふりさるる 法考

あふりさるるのあふりさるるのあふりさるる 蓮考

あふりさるるのあふりさるるのあふりさるる 貞代

冬巻

金屏の松のあふりさるるのあふりさるる 冬巻

大根のあふりさるるのあふりさるるのあふりさるる 蓮考

せんくのあふりさるるのあふりさるるのあふりさるる 石筆







鶯の巢をくぐるの暮きや  
あつたのやれ休る目もなれ山  
まじりてきてくさくさぬの嵐  
たすくともさうなまあつら  
あふ解やあふるあふる人  
奉白

半酔半醒の辞

秋成叙さうあつた時さうな  
燈籠やあつたあつた目点山  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

東海を渡る船の  
ちりほり

ちりほりあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

舟中  
あつたあつたあつたあつた

十月やあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた







真室  
 西武  
 玄扎  
 芭蕉  
 言水  
 信徳  
 路通  
 雲靴  
 貞作

享保九年

非ぬやいせの山田ある葛氏の歌よ  
 ゆうりせしきして家も心も  
 十四日自山もいささか  
 かしらて古々のかたの御経の巻  
 心をすすけらるる月のおまはれ  
 けいせを強しなまももまのん  
 別をさす人よといつふと思ひ  
 や

鳥護増賀夜

鳥一ぬ 後ろきし 自あり  
 花感<sup>ス</sup>西行時<sup>ヲ</sup>  
 支考

花のそく 泪やぶるか  
 同



徳元

ほついに身のせうらの師走うら 徳元

大途にゆくめのおぢよおぢひ 其角

福のよひ言鞠のさうじ歌 和英

あつたやほき笑われこの言 嵐雪

ふとむ身のさほよ身のこま 文麟

手紙やま分り顔とていほき 珪珠

おこきの浦より

目と目のまひかたおれ師走は 蓮谷

市へ入るとはりし心と師走うら 素堂

光陰道行 晋 其角

素戸をめておふまゝ人目とかられ里

あつたくともかゝらん破道庵の要う

路のあまひま昔のせわれこのみかたせ

二見かゝ作務の申向のそなまきやう

かるうやハ車の拭ううあつたあふかの

結成のまのひ書そのあまさき

あつたあく月あはゆるあつたの泪

ふりるあつたやまはるを記して信



△三十一

ふうてっ中いほけらまー 巳の月れ後  
ゆりての指さひもてのむかを川やらく  
漱とけしてまらうけうれきまへ スツトニ  
そんとあてつゝまらうけうれきまへ 杖の下より  
も歎とあけりしをもちうらふ世の中一の  
うまひのまらうけうれきまへ スツトニ  
又逢坂の関もまらうけうれきまへ  
まらうけうれきまへ スツトニ  
あゝ声ハ 涼まのまらうけうれきまへ

ほんまめしをあらくといひくう 荊原の体  
とや依んぬの里のぬけつるようわう君の心れ  
うちまらうけうれきまへ スツトニ  
まらうけうれきまへ スツトニ

嵐もやうてなりしんみ 其由  
引つゝまらうけうれきまへ 同  
嵐の志とくまらうけうれきまへ 同  
おろきん我や嵐まらうけうれきまへ 同



松ありて空へ解ひく花うら  
 前なる涅槃の輪と極なり  
 五葉の盆や極く花の果うめむ  
 花よりして花あつるおまの  
 物くめなる中より花のものを  
 柳うらなる花の葉のうら  
 花のあまた花もさうす  
 花の葉の花の葉をい  
 花のよも花のさうす

貞代  
 立志  
 園女  
 西彦  
 其角

湯成五倫

君臣有義

赤ののさりしを忘れ  
 風箱のものをさうす

其角  
 沾徳

父子有親

鮎けや悟る娘の  
 おもむとあそ見丸の桃の

其角  
 沾徳



夫婦有別

新法の如く出ぬとありぬ

其角

けりとのむるものありしを

沾徳

長幼有序

穉者ハ姑のふるもをばふ

其角

物おととそとさしとさすや

沾徳

朋友有信

君と我徳のよとがつとさる

其角

有りの世話やいふるの原

沾徳

答雲虎和尚

園女

何る書の名流をいふか求真不求

大乃の根原誰もあらず不

一心修成ふのゆいでの高徳と柳原花

其徳ありて常の句といひ奇

非いかりとすとの口業は

もさるるの口業ありて人法

場いありて下徳ありて念佛と

二奇とや極楽へゆくまよ

大徳



入もいれぬしとていふも、おきす分ふ、人  
やうもいふもいふも、おひりたりかたふ  
やうもいふもいふも、いふもいふも

和玉韻

自己念其不覓心 法舟已耀一灯心  
市中點ニ有明鏡 全識人間清淨心  
誰ういふん、いふもいふも、いふもいふも、  
いふもいふも、いふもいふも、いふもいふも、

源頼光お右左衛門の法舟より

よる夜舟の代と

その舟の法舟を歌にして

いふもいふも、いふもいふも

源集の中よりいふも

いふも

いふもいふも、いふもいふも

頼光お右左衛門の法舟より

大ぬか一版もいふもいふも、いふもいふも、  
貞佐

源頼光お右左衛門の法舟より

源うきつゝあつ、いふもいふも、いふもいふも、  
其角

源頼光お右左衛門の法舟より



高松や松公時うらなぬらう

ふぶく糖と電るる

あまのほの風をうらまへり山はく

深義家うらると電るる

物産や八幡を命うらはしめ

同奥州政のうら

ふぶく糖と電るるもむの山

宋任都うらまへり

同ふぶく糖と電るる梅の花

山

嵐雪

氷花

専吟

琴風

平太盛哉字のうらまへり

まじりのうらまへり

源頼政糖と電るる

うらまへり糖と電るるの都に

平五郎盛盛字のうらまへり

いづれうらまへり平家の書りうら

富士川をうらまへり

あまのほの風をうらまへり

田原みちをうらまへり

露言

蓮谷



母衣うけて一騎もあらず川柳 下海

宇治金銭のう

粘るおやままとたかしく甲印 蓮若

宗盛奈越さよらるる

車よしてとらんもらんやせし山 千首

活殺故自殺のう

あめのむちのちる果のちもむし 蓮若

まじり醫王山へ金と送らる

度とも親のひらくも金銀花 其茶

小山草持のう

閑果のゆえにこもるるのこり 沾洲

待賢門夜軍のう

あのをこもる付死の松う那 瑤烟

あらののうらむ

かゝるおの煙うらちやあのをむ 琴風

おのね作豆坐へ深罪のう

うさをとあれぬう小舟の田植腰 香吹

日義とあらるる



大根を中作互の如族十三根 矢代

牛の丸を人斬のり

長刀のおもむきし海に橋の月 支考

牛の丸 奥州下向のり

ふの夜と吉沈の冠をよ根を 寺田

赤は山角力のり

角力とり並あやの如のるを所 為香

戦馬のり 水陸道のり

代をとりてともいのり 高倉屋 矢代

月と縁のり

背いつ武を云と縁川の如 伝海

美盛に付死のり

梨実梨と流へる福の怪り由 矢代

義伴抄奥のり

山吹もさへくも出る田のり 新六

高松系時先陣と

代をとりて梶をば 郭と 皆代

一のり名ひのり 越のり



柳の尾に流れる水は どのよ 川に

おなじと六段を組付のり

おれ組入あるうりよ 砥石の 宗用

おなじ一首のうりよ

おなじと一層のうりよ 大坪の 千海

八段全段のり

川崎のうりよ 藤のうりよ 川崎のり

平家舟のりよ

奥のうりよ 舟のりよ 舟のり

我師のうりよ

急のうりよ 舟のりよ 舟のり

急のうりよ

急のうりよ 舟のりよ 舟のり

急のうりよ

我師のうりよ 舟のりよ 舟のり

急のうりよ

急のうりよ 舟のりよ 舟のり

急のうりよ



室川やらの主人も膝しら 貞徳

成吉思汗の後のもの

美濃の法師とやら 笠原のや 立志

頼朝の年天下のもの

あゝいもうら 川原もあゝいもうら し由

西条はるる系合紙のもの

新とんや 柳うつ 波のすゝくし 尚白

巴勇力のもの

秋穂てきききくくや 中う 辰 正秀

今井氏自書のもの

兼平の 喰うて 死ぶるゝ 七の 笑 白雲

我作流矢よわらるもの

田の 曲う 射て 着 引り 天は 尸 地亭

系流頼朝の 糸糸のもの

こゝの 右と 包むゝ 芥子 聖へ 琴風

系流頼朝の 糸糸のもの

奇習よあゝもの

花柳や 継ととあゝの 柳のもの 弘俊

らゝの 判及 成吉思汗のもの



六月あつちぬくおとれを病むを 似妻

我流富樫の園を過る

園のこころゆふや 粟の海す 千海

弁をよ柳を水と流る

強力のりゆふ 土まこと 鬼あさみ 壺目

弁をよ衣川をそぬをゆ

静火のま性生の十あつち して

工者林の枝を柄のゆ

うつて過る高野の光る自 貞代

和田信のゆ

あつちあつちまよ 一の言 園女

ま指のひかふをぬる 氷花

首我兄の枝を傷むをひかふ

万のまや枝を傷むをまふりて 瑠璃

白あつちのゆ

あつちあつちあつちあつち 去来

十番切のゆ

武流あつちあつちあつちあつち 丁角



秋成しつゝ

とるまじくしつゝとあしあしの群のま

欠徳

時宗と捕まへり

蟻たつ川をさして小橋をた

とま

公使とまゐりておこし

怨悔をさしおろしきおこし

執牛

武蔵守と恭時改務の

式目と定まる

名りの出るやあしこし條

とま

とるまじくしつゝとあしあしの群のま

月影のまゝに依りて

建谷

とるまじくしつゝとあしあしの群のま

管火の百りまのあり借川

家園

とるまじくしつゝとあしあしの群のま

おこしとあしあしの群のま

欠徳

とるまじくしつゝとあしあしの群のま

とるまじくしつゝとあしあしの群のま

欠徳

とるまじくしつゝとあしあしの群のま

とるまじくしつゝとあしあしの群のま

欠徳











う  
秋鷄おそろしき人の唄けし  
杜姪おしるも地獄めのお  
虚言傳の埃の口舌をふきぬり  
玉ひらりちりて田とこへ  
坂の細雪のきれく志うみこ  
折傷の扇風おきんも打  
焼餅の志の腹切てうまわしせ  
ふもふも籠るる香中の白  
赤紫のれう天工へ物とりけ

春紅火漸んと其おるふり  
うとん玉二つと雪おのえらぬの月  
おぬぬりうさむねむん  
二  
おうてと物うらうらう角力ぬ  
奴の口火の世のあられす  
脱ちぬ鞠場をふれはたのよ  
丁銀とく人 光陰の味  
木使てこめれはあは死を指  
石風とあうく清と山伏



冷けとさりぬけりて雀の志  
裸て昇るそりぬけりて  
小田原の風を吹くしりぬけり  
紫雲の影をさしぬけり  
月夕の影をさしぬけり  
雀の影をさしぬけり  
鳥の影をさしぬけり  
久米平の影をさしぬけり  
川白の影をさしぬけり

さりぬけりて雀の志  
鳥の花の影をさしぬけり  
雀の影をさしぬけり

栗穂菴即真吟

石通せし庭も常の柳の影  
山とぬけりて陽の影  
下る影の影をさしぬけり  
皆とぬけりて先づ川  
負作  
蓮谷  
沼洲  
超波



三吟 蓮谷亭真行

傳くを四十八字や 幸うん美

東里

卯山の片々う尻う交う草

貞作

通まての辻まうつふ柳うそ

蓮谷

およのあんぬるあゆま海草

里

冬月やほそよ木の中は隈

佐

男うまうぬるうりの声

谷

<sup>ウ</sup>温泉の又あまをわ——入る根

里

投ぬるわ——のまとうつ竿

佐

荒るる中の傳ふあせてせとあまや

谷

目のぬれを老のふ仮

里

春つるれ今きけうのあや煙

佐

首うもあけう我むぬのうけ

谷

飯の湯るん通の月よあつく飲

里

いつまて然しき山系蕪うり

佐

とんと奥大隅の隅ある花のる

谷



高しおろりおろりける 里  
雛ちりき二十五日の湯浴なる 佐  
洗りの堂してさかきまひり 谷  
地狭おまの下言と字おと森は 同  
舞やとと月の母をよま 佐  
後とせん捨て袂へ衣ゆぬ 里  
櫛あゝぬんて思ひあせん 谷  
屋あゝぬんとも先條つけ 佐  
あの一とあお袋の神 里

貸たぐすぬ七梓かけれて 谷  
あけの負ハ廣奥標とるん 佐  
新舞い揃あゝあるよ建るあり 里  
うみせんおて短杖の月 谷  
下つと建る築るハすつりの後所 佐  
比血尼の尻のまふてんて 里  
うらぐとととつり通帳 同  
打くうまゝぬ櫛よとととる 佐  
猿丸の葉しはあをる吐の時 谷



柳の歯くさる 竹路のう後 里  
足向つのはいささうりむらり 作  
詩と片くりらん 谷

東里 十二句

貞作 十二句

蓮谷 十二句

坤の巻は流りうりきりまの言

書林  
市島右衛門

海序

離俗といふをわきまありてその如きこと  
ありしん九離俗の心をばさうてあう  
ゆるめてみよとありされにん心もあふ  
初もさるる自然のあうに九俗の怒りを  
あつめ早懸のうれへを助るる理もあふ  
師て一奇くまをあらうといひいふとまの  
の流るる徳もあふ山万のあを眼裏に  
ちめてあふといふと思ひく名もあふとく



心よりとてさるるをのほれくをさるるを感ん  
世よ人の心乃りてくしより排傷の心なれり  
乃りて益をいふものと思ふれとてさる  
いはるに三綱五常のたとひて富貴は  
はるるを金貨は益を世法の進退を  
とのを刻あらんやさるるに此れよ思ひ入り  
作らるる都も鄙も師もあつて学よは  
かきさるるにさるるに三人あまはるる  
その師ありしをさるる其講をとかくり

其師指の排傷ともあれといふ人あり  
いてや先をとあかくち武宗程も仲興を  
ういふは勝の一字と起さるるより文臣  
ふりて風骨のふれとてさるる也  
さるるれと其之の排傷の風骨を何よは  
波淀川をいふ一集をありし昔の心  
あつて花実兼師の言をいふより  
其の流るるをいふに何れも向も  
あつてあまの集をいふに何れも



ふれよとらふて中めもを武ふ句かたひの  
万葉をもよほさるへくすしてこの世より  
立先らに編集の句毎うそ元か出玄の  
句をわらへ初と後も皆古先くして  
今めくそふらの風姿ふまはの論あり  
そのつらう深山松のむはくうへも人を  
ちりそらるもほはやあはていそく我  
思ひおまへ世ありあはれ編集もくは  
うらひあはりしそれもまよ人の身よ

名もあはれもあはれ人の句も真一で銭  
あはれをいへ中へもあはれで扱  
かきかきと又ちりやちりそあはりり  
きたいふの風姿あはて飛を川の園  
このそかきうはりもあはれのあはりうはり  
あはれあはれこの風姿あはりの風姿あはり  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ



はる世の人のあはれを拾ひたりいかに  
とやてまを祝のあはれをいかに  
ほのまはれのあはれをいかに  
くとて十万句のあはれもあはれ  
ふたつとまはれのあはれをいかに  
さへとてあはれをいかに  
埃うまはれをいかに  
人あはれをいかに  
はる世のあはれをいかに

とらへてあはれをいかに  
はる世のあはれをいかに  
みよとてあはれをいかに  
わらへてあはれをいかに  
はる世のあはれをいかに  
きん其徳をいかに  
より興をいかに  
はる世のあはれをいかに



情と花との凡雅の格の真如と  
 あくわかれと思ひあれと  
 て我心のいとほの欠く  
 情をいふ我舟歌を  
 為すほのうあはれ  
 涙の音うたの  
 氣骨を削りて  
 月とわやうと  
 言ふ。あはれ

とわやうとわやうと  
 平るうむうひて  
 うと海原も  
 心のはら  
 の好い  
 され  
 うう  
 いの  
 命の中



の獲きとてさしひりしやむとてその甲より  
穴とていふも是皆心持とてなるは世  
のあつたあつたしとけりうのさしひ  
ぬしと我志をのこすけとてさしひ  
心やりしは温故集といふ歌とていふ  
よつと乾坤の二変とてなれどもさし  
今ふなりしとていふ人もさしひ  
とあめ入る湯とていふ集とて  
さしひ人のさしひとていふ集とて  
もけりし我志をいふ人もさしひ  
我志をいふからやとていふ人の句と  
感しては集とていふ人もさしひ  
一樹の陰一木の風とていふ風流よ  
あしひとていふ人もさしひ

鐘度のほろり  
雷風菴 蓮谷書





延享五戊辰年二月廿五日

書林

京都堀川通錦上町  
西村市郎右衛門  
江戸本町三丁目  
西村源六

文刻堂何種目録

民家分量記	野總名話	民家童蒙解	田舎在子外篇	河伯并蛙文談	天狗藝術論	六道士會録	英雄軍談	近世軍談
常世良作 全五冊 二巻二冊の書あり 三巻一冊あり	同作 全四冊 一巻二冊あり 二巻二冊あり	同作 全五冊 一巻二冊あり 二巻三冊あり	同作 全三冊 一巻二冊あり 二巻一冊あり	同作 全四冊 一巻二冊あり 二巻二冊あり	同作 全五冊 一巻二冊あり 二巻三冊あり	同作 全五冊 一巻二冊あり 二巻三冊あり	同作 全五冊 一巻二冊あり 二巻三冊あり	同作 全五冊 一巻二冊あり 二巻三冊あり

今川櫻越状

全一冊

柳家流清集

建初買文筆 全一冊

初學消夏集

全一冊

假名文章

全一冊

万葉書札

全一冊

風月往來

全一冊

庭訓往來

全三冊

愛蓮説

廣澤筆

贈去來辭

同筆行書



自道落 臥俗文集  
全三册 北華朝

蝶比遊  
全三册 北華朝  
松島紀行名所

不思庵書口札  
全二册  
自道落先生作  
北華朝

古今智惠枕  
全三册  
自道落先生作  
北華朝

武家軍談  
全四册  
ひろくろ五入

同軍鑑  
全三册  
ひろくろ五入

武家功者物語  
全三册  
ひろくろ五入

画圖百花鳥  
全三册  
得野撰出華重中子字  
全五册 豆村百鳥  
全三册 竹書  
全三册

縛本裁紳  
全三册  
裁紳の道とわい  
全三册

新後明題  
全三册  
泉景境詩歌集  
及入堂上地下の備

泉景境詩歌集  
全三册  
及入堂上地下の備

和歌戀衣  
全二册  
入和道の物語  
和歌のたより  
全二册

正運紀略  
全二册  
大運紀略  
全二册  
正運紀略  
全二册

老子本義  
全二册  
老子傳の大意  
全二册

老子答問書  
全二册  
老子傳の大意  
全二册

蘆隱稿  
全二册  
蘆隱先生著  
全二册

明詩選  
全二册  
全三册  
自道落先生作  
全二册

歷代帝王書  
全二册  
全三册  
自道落先生作  
全二册

文章心言  
全二册  
全三册  
自道落先生作  
全二册

銀燭帖  
廣沢先生門人  
全一册

中書措訣  
華庭先生著  
全一册  
筆法の要訣  
全一册

芙蓉卷八勝帖  
折本一册  
鳥石先生書  
行草字本

使者帖  
鳥石先生書  
行草字本

登樓賦  
全二册  
八力字本

草書十字文  
同筆  
全二册  
石抄

七物帖  
同筆  
行書  
全一册

禮部韻  
鳥石先生技開  
全六册

に酒こり  
全二册  
江戶榮  
全二册  
江戶榮  
全二册

前向甚附本  
全二册  
江戶榮  
全二册

俳諧のすり山  
大塚全一册  
前向甚附本

俳諧句彙  
全二册  
俳諧句彙  
全二册

同寄進能  
全二册  
同寄進能  
全二册

同宮儀  
全二册  
同宮儀  
全二册

同園の梅  
全二册  
同園の梅  
全二册

同友安久尺  
全一册  
同友安久尺  
全一册

同有渡日記  
全一册  
同有渡日記  
全一册

同犬椿集  
全二册  
同犬椿集  
全二册

同何老婆  
全一册  
同何老婆  
全一册



釋親考

伊藤東涯著 全二冊  
釈教の精神と宗義を究むるに在りては儒の流とを要する

七經孟子考文

度量衡考

白石先生餘稿

停雲集

翻明令

伊呂波童蒙抄

冠註算算大全

和利局方

醫學的

醫要談

阿彌陀如來出現記

宗介禪師語錄

捷徑辨義

大般若經轉義

粥飯日用鉢式

遺身往來傳

聖道衣料編

鳳臺小稿

古今余道論辨

同孫娘の雪

同反古拾遺

同蘇集

同まゝ前集

同形句兄弟

同井蛙問答

同其砥

同風乃末

同挑揚

洞硯沢

同吾妻海道

同あゝの翁

同煖れ杖

同十々々煉

同古すたれ

同老山集

同後河百員

同江戸七歌仙

同芭蕉林

同芭蕉拾遺

全一冊

全二冊

全一冊

全二冊

全一冊

全一冊

全三冊

全一冊

全三冊

全一冊

全二冊

全二冊

全三冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

伊藤東涯著 全二冊  
釈教の精神と宗義を究むるに在りては儒の流とを要する

全三冊 新井孫娘の雪  
白石先生の遺稿

全二冊 龍山先生校訂  
同作

全三冊 伊呂波童蒙抄  
同作

全三冊 冠註算算大全  
同作

全三冊 醫要談  
同作

全二冊 阿彌陀如來出現記  
同作

全三冊 捷徑辨義  
同作

全一冊 大般若經轉義  
同作

全一冊 粥飯日用鉢式  
同作

全一冊 遺身往來傳  
同作

全三冊 聖道衣料編  
同作

全一冊

全二冊

全一冊

全二冊

全一冊

全一冊

全三冊

全一冊

全三冊

全一冊

全二冊

全二冊

全三冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊







宣和書目録

享保十一年<sup>丙午</sup>歲八月吉日

京都書林  
西村市郎右衛門

六角通鳥丸西入町

東都書肆  
西村源六藏版

本町三丁目

彫工  
栗原

江戸豊島

二冊  
ウソ



